

宮内庁書陵部蔵『説文解字斟詮』の校語から探る狩谷棧斎の説文学

藤山和子

はじめに

狩谷棧斎（一七七五—一八三五）は説文、とりわけ晩年は段玉裁の『説文解字注』に多大な関心を示していたが⁽¹⁾、『説文解字注』に関する棧斎の言及はあまり多くない。その理由として、『説文解字注』が日本へ舶載された当初はそれを手に入れるのが難しく、わずかに松崎慊堂が時の大学頭林述斎から借りた『説文解字注』三巻をもとに、慊堂宅で行った文政十（一八二七）年六月二十九日から九月十九日までと、文政十一（一八二八）年四月十九日から五月十九日までの十回の会読⁽²⁾で接することができただけであったことが挙げられる。また、晩年には『説文解字注』を手に入れ、棧斎主宰の説文会を岡本況斎、小島成斎らと行っていたと思われるが、それは天保四・五（一八三三・三四）年のころで、天保六年には棧斎は死を迎えている⁽³⁾。このときの説文会会読の記録が岡本況斎の『説文解字疏』（天保五年）と推測されるが、その内容は一卷上下と十五卷上

下のみである。もともと、況斎自訂の著作目録『拙誠堂叢書目録』によれば、『説文解字段注考』巻一卷二卷三卷四卷五卷十五以上稿成、巻一上浄書巻十五浄書とあるので、五巻まで会読は進み原稿はできていたのかもしれない。ともかく、『説文解字注』全巻の会読が終わっていないということと、恐らくは体調も思わしくなかったこともあり、『説文解字注』に関する言及も、さまざまな書物の校訂に『説文解字注』を使うこともあまりなかったであろう。

ただ、書物の校訂に『説文解字注』を使用する気持ちがあつたことは、棧斎が独自に作った部首検索のための書『説文檢字篇』に「説文段注」（『説文解字注』）の欄が設けられていることから窺うことができる。『説文檢字篇』とは『説文解字』の部首五百四十字を画数によって分類し、そのそれぞれの文字が『説文真本』『説文段注』『説文韻譜』『玉篇』『竜龕手鑑』『五音篇海』『五經文字』『九經字樣』『六書故』のどこにあるか検索しやすいように、その巻と葉数を記入編纂されたものであ

校語の校語の実態

る。ただ、段注の葉数記入は一部のみで、ほとんど空欄のままである。空欄のままであるにせよ、段注の欄を設けているということは、それを校訂に用いようとしたからであるに相違ない。校斎が『説文解字注』を書物の校訂に使用した僅かな例として、清の錢坫が撰し、嘉慶十二（一八〇七）年に刻された『説文解字斟詮』十四卷十四冊がある。校斎の校語が書き込まれた『説文解字斟詮』は現在宮内庁書陵部に蔵せられており、『図書寮漢籍善本書目』巻一には「全冊狩谷望之の硃筆校語あり、細楷精を極む、望之力を説文に用うることも尤も深し、故にその説創見尠からず、亦珍重すべし」と記されている。ただし、段注が校語に引用されるのは一卷の玉部までで、それ以降は錢大昕らその他の学者の説のみが引かれている。

小論は校斎が『説文解字斟詮』の校訂に引用した段注を検討し、校斎が『説文解字注』のどこに注目していたかを明らかにすると同時に、「細楷精を極む、その説創見尠からず」といわれた校斎の校語と段注とを比較検討し、校斎の説文学の傾向を探ろうとするものである。

なお、『説文解字斟詮』は十四卷であるが、『説文解字』は後序がついて全十五篇、十五篇すべてを上下に分けて三十卷としている。『説文解字注』も同様である。ここでは混乱を避けるため、『説文解字斟詮』には巻を、『説文解字』並びに『説文解字注』には篇を用いることにする。『説文解字斟詮』一卷は『説文解字』・『説文解字注』一篇上下に当たる。

『説文解字斟詮』を撰した錢坫（一七四一—一八〇六）は、清の著名な学者錢大昕の従子に当たる。小学に精しかったといわれ、『説文解字斟詮』十四卷の他、『詩音表』一卷、『十經文字通正書』十四卷、『爾雅釈義』十卷などの著作がある。凡例によると『説文解字斟詮』は『説文解字』の毛斧展刊本、宋本徐鉉官本、徐鍇繫伝本⁽⁴⁾、唐以前本⁽⁵⁾の誤りを^{ただ}斟し、傍解・誤読が通行して正義・本音が明らかでなくなった文字については、許慎のいう正義・本音を、また、経伝では一字のみであるのに許慎には数字あり、逆に経伝では数字あるのに許慎には一字しかないものについて許慎の意を説明したものであるという。本文は親字を小篆で記し、下に説解が双行の楷書で付けられ、一画空けて錢坫の注が続く。要するに、『説文解字斟詮』とは、錢坫が『説文解字』の各種版本や関係資料を用いて『説文解字』の校訂を行ったものといえる。

現在宮内庁書陵部に蔵する『説文解字斟詮』十四卷十四冊は、全冊に自筆書き込みがある校斎の旧蔵で、首に「校斎」「狩谷望之」の印があり、尾には「湯島狩谷氏求古樓圖書記」の印がある。また、毎巻の尾に「木正辞章」の印があり、『図書寮漢籍善本書目』によると、文学博士木村正辞が献じたものであるという。

校斎の校語は主として頭注の形で付けられ、ごくまれに本文

中に小字で書き込まれたものがある。また、いくつかの巻初、巻末には『周礼』『詩経』『爾雅』の釈文や玄扈の『一切経音義』などが覚書のようにして記載されている。

逗点は凡例と錢坫の注には藍で、説解には朱で入れられているが、藍で逗点が入るのは一卷の錢坫の注と、四卷「鷲」字（三十二葉裏）に付けられた非常に長い錢坫の注のみである。説解については一卷の「芋」字（二十三葉表）までと、四卷「𦵏」字（十葉裏）以下十四卷末までのすべての説解に朱で逗点が入られている。二卷・三卷は説解にも錢坫の注にも逗点が入っていない。

椋斎の校語は点の切られていない二卷・三卷を含め、十四卷すべてに記入されているが、最も量が多いのは一卷で、そのほとんどは『説文解字注』からの段説の引用である。ただし、それも一卷「玼」字（十八葉裏）までで、それ以降は、四卷初^⑤と十一卷初^⑦に『説文解字注』を読んでの覚書と思われる「段玉裁云…」という記載が二ヶ所あるのみで、その後十四卷末まで段注からの引用はない。

『説文解字注』からの引用ではないが、段説を引くものに、十巻初の覚書と、十一卷「潛」字（七葉裏）の上に書かれた頭注がある。十巻初の覚書は、『爾雅』釈獸の文「鹿其跡速」に関する段玉裁の意見と椋斎の按語を記したもので、これは椋斎が『爾雅注疏』校訂の仕事をしたとき阮元の校勘記から段説を引用し、それに椋斎の按語を付したもので^⑧、恐らく『爾雅注

疏』校訂の仕事が先で、後に『説文解字斟詮』に書き写されたものであろう。^⑨ 十一卷「潛」字の頭注は、段玉裁の『詩経小学』からの引用である。^⑩

段説以外に一卷から十四巻までに見られる校語は、椋斎自身が『説文解字斟詮』と毛本、繫伝、孫本、韻譜などと校勘した結果や、錢大昕、王鳴盛、畢沅らの説を引用したものである。なかでも最も多いのが『潜研堂集』卷十答問七「爾雅」、卷十一答問八「説文」などからの錢大昕の説の引用である。また、椋斎の按語も記されている。

巻初、巻末に記された覚書は恐らくその時々に記載されたもので、記載のあとさを推定するのは難しいが、頭注に関しては、段注を使つての校訂は、その他の校訂の後に書き込まれたものと思われる。そのように考えられる理由の一つとして、椋斎の書く字は実に几帳面な美しい楷書体で、文字の大きさも揃つて乱れがない。ところが「社」字（一卷七葉裏）の説解「周礼二十五家為社」に付けられた頭注には、

i 風俗通義曰、周礼説二十五家為社、賈逵杜預注左伝、高誘呂覽、薛瓊五行志皆同。

とあり、すぐ続いてやや大きな字で、

ii 荀子楊倞注仲尼篇亦云、周礼二十五家為社、而今本無載、

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--|---------------------------|----------------|--|--|--|--|--|---------------------------------------|--|----------------------------|-----------------------------|-------------------------------------|--------------------------------|---|----------------------------|-----------------------------|----------------------------|---|
| <p>風俗書曰周礼記云 為社置社於土中 荀子楊倞注云 云周禮二十五家為社 本無社蓋古同音字也</p> | <p>氣氣古今字 聲借從有是字誤之</p> | <p>俗誤從從之字誤</p> | <p>段玉裁云今通書 此字當在土部內 均分日 此字當在土部內 均分日 此字當在土部內 均分日</p> | <p>段玉裁云今通書 此字當在土部內 均分日 此字當在土部內 均分日 此字當在土部內 均分日</p> | <p>段玉裁云今通書 此字當在土部內 均分日 此字當在土部內 均分日 此字當在土部內 均分日</p> | <p>社 地主也从示土春秋傳曰共工之子句龍為社神周禮二十五家為社各樹其土所宜木 繫傳作土穀大司</p> | <p>禘 道上帝祭从示易聲 郊特牲鄉人薦注禘強鬼也謂時</p> | <p>禘 禘索室殿疫逐強鬼也禘或為獻或為傳是禘即時健</p> | <p>禘 精氣感祚从示侵省聲春秋傳曰見赤黑之禘 視祚謂日有氣然則赤黑之禘亦日有占也古日有有專官</p> | <p>禘 之視祚與 漢之日有周</p> | <p>禘 害也神不福 也从示尚聲</p> | <p>禘 神禍也从示道聲 示从出 出从巛 巛从巛</p> | <p>禘 地反物為祿也从示笑聲 今為祿</p> | <p>禘 明視以華之从二示逸周書曰士分民之祚均分以祚之也讀若華 此逸周書今見墨子士字作言此與華字同用廣韻祚明也凡計歷數之器為算數之為算數已明為祚</p> | <p>禘 吉凶之忌也 从示林聲</p> | <p>禘 除服祭也从示算聲 本書</p> | <p>禘 三引導服此字後人所加</p> | <p>文六十三 重十三 天地人之道也从三 數凡三之屬皆从三 古文三从弌 禘 傳無从弌二字</p> |
|--|---------------------------|----------------|--|--|--|--|--|---------------------------------------|--|----------------------------|-----------------------------|-------------------------------------|--------------------------------|---|----------------------------|-----------------------------|----------------------------|---|

宮内庁書陵部蔵『説文解字斟詮』一卷七・八葉

蓋古周礼家説也。

とある。さらに本文の説解の「从示土」と古文には、余白にやはり小字で、

- iii 錯本無声字、韻会所引是。
- iv 段作𡵓云、各本従示非古文也、今依夏氏竦古文四声韻所引。

と書き込みをしている。i iii ivはいずれも『説文解字注』の段説の引用であるが、iiの内容は段注にはない。掖斎が独自に『荀子』楊倞注から引用し、それについて掖斎の考えを述べたものである。iiの書き込みだけがやや大きめの字で書かれているということは、i iii ivとiiの書き込みが異なる時期のものであるということを示している。その前後関係は『荀子』からの引用が先で、段注からの引用は後だと考えられる。つまり、掖斎は説解の「周礼二十五家為社」の句について、同内容は『荀子』の楊倞の注にも見えるが、今本『周礼』にはないので、恐らく古の周礼家の説だろうと推測していた。その後、段玉裁が『風俗通義』を引いて、許慎が周礼といているのは『周礼説』のことであると述べているのを知って、それを書き留めたのだろう。もし、周礼とは『周礼説』のことであるという段注を先に見ていたならば、『荀子』楊倞注は引用するまでもない

内容のものだからである。

枚齋はまず、錢坫の『說文解字斟詮』を繫伝、毛本、孫本や經書を用いて校訂し、その結果を頭注の形で書き込んだが、後に『說文解字注』に接する機会があり、段説の必要な部分を書き入れていったのだろう。その時期は松崎慊堂宅で說文講読を行っていたときか、後に自身が『說文解字注』を手に入れて、岡本況齋らと說文会を開催していたときかもしれない。ちなみに、慊堂らとの說文会で読んだのは、読書会の回数からいって一篇上下と思われる^①。況齋らとの說文会では五篇上下までと十五篇上下を読んだようであるが、枚齋の影響が大きかったと思われる会読の記録は、既述したように況齋の『說文解字疏』として一篇上下と十五篇上下のみがまとめられ、そこには『說文解字斟詮』の説解や錢坫の注も引かれている。しかし、それも一篇上の示部の途中までで、それ以後はまれに記されるのみである。いずれにせよ、枚齋が『說文解字斟詮』『說文解字注』の二書に同時にかかわったのは、一篇上（『說文解字斟詮』では一卷玉部まで）に止まるようである。

枚齋の校語とその說文学

『說文解字斟詮』に書き込まれた枚齋の校語の内容は、『說文解字注』からの引用、段注以外の他書・他説の引用、枚齋の按語に分類できる。その代表例を挙げてみると、

『說文解字注』からの引用

親字と重文に関するもの。

「上」（『說文解字斟詮』一卷一葉裏）（『說文解字注』一篇上二b）

段玉裁改上作二、改上作上云、古文上作二、故帝下旁下示下皆云、从古文上。

親字と重文の字形を変更

「禪」（二卷六葉表）（一篇上十三b）

段云、凡封土為壇、除地為墀、古封禪字蓋祇作墀、項威曰、除地為墀、後改墀曰禪、神之矣。

親字の字形を説明

説解に関するもの。

「稟」数祭也、从示𥝹声、讀若春麦為稟之稟。（一卷五葉表）（一篇上十二a）

段注二稟作𥝹云、各本譌从示、不可解、広雅稟春也、楚芮反、說文無稟字、即曰部春去麦皮曰𥝹也。
説解中の字形を変更

「禪」安福也、从示是声。（二卷三葉表）（一篇上五b）

段刪福字云、依李善文選注。説解中の文字を削除
「璣」弁飾往往冒玉也、从玉基声。（一卷十四葉表）（一篇上二十八a）

段飾下依詩音義補也字。
説解中の文字を増加

「禩」禩牲馬祭也、从示周声、詩曰既禩既禩。（一卷七

葉表) (一篇上十五 a)

〔段云〕錯引詩曰既禡既禡、詩無此語、鉉又誤入正文。 説解中の句を削除

〔秘〕佩刀下飾、天子以玉、从玉必声。(一卷十三葉裏) (一篇上二十七 b)

段云、小雅毛伝云、天子以珽、説文珽字下亦云、天子珽珽、此当云、天子以珽、諸侯以玉^⑫、浅人妄竄改。 説解を改め句を増加

〔旁〕溥也、从二闕方声。(二卷一葉裏) (一篇上三 b)

〔段云〕錯作方声闕非。説解中の語の順序を変更

〔祔〕明視以筭之、从二示、逸周書曰、士分民之祔、均分以祔之也。(一卷八葉表) (一篇上十六 b)

段云、士分民之祔、今逸周書無此語、当在亡篇内、均分以祔也、此釈逸周書語、或曰、本典解均分以利之則民安、即此句也。説解中の句の出典を説明

親字と説解全体の削除と移動

〔禪〕(二卷八葉表) (一篇上十七 a)

段云、考士虞礼注曰、古文禪或為導、喪大記注曰、禪或皆作道、許君蓋從古文不録今文禪字、且祔字重示、当居部末、如顛耶聶聶皆居部末是也、祔字下出禪字、疑是後人增益、鄭君從禪、許君從導、各有所受之也。

親字と説解の削除と、部首を重ねた字の位置につ

いて

以上見てきたように、校斎が『説文解字注』から段注を引くのは、親字や説解の字形や句を改めたり、あるいは削除・増加する場合に限られる。段注以外の他説を引く校語については、そのいくつかを挙げれば次の通りである。

『説文解字注』以外の他書・他説を引く校語

親字に関するもの

〔錫〕(五卷三十三葉表)

諸本作錫、注亦作易声非、六書故作錫云、徒郎切、又云、易与唐同音、孫氏徐盈切、易非徐盈之音、則知戴氏所見説文不从易也、釈名云錫洋也、煮米消爛洋洋然也、以洋釈錫、則从易可知、周礼小師釈文云、錫辞盈反、李音唐、毛詩有瞽釈文錫、夕清反、蜜也、又音唐、方言云、張皇也、並音唐、則可証从易、今本作錫者訛、其徐盈辞盈夕清、皆是徒郎之一轉耳、故錢氏改作錫、注亦作易声也。

錢坫が親字を改めた根拠を説明

説解に関するもの

〔璫〕璫圭公所執、从玉獻声。(二卷十二葉裏)

諸本注璫作桓、錢大昕曰、璫即周礼公執桓圭之桓。 説解中の文字の変更に

〔莛〕束葦燒之、从艸巨聲。（一卷五十三葉表）

韻譜繫伝並無之字、毛孫本同。

脱文、諸本皆有。

『説文解字斟詮』の脱文について

説解中の文字の削除について

〔蠱〕丁蠱也、从虫龍聲。（十三卷二十四葉裏）

盧文弨云、説文蠱下注本作蠱丁蠱也、蠱丁二字為句、俗本乃刪去注中蠱字、而以丁蠱為句、大誤、刑昺爾雅疏亦沿誤本、玉篇𧈧字注云、蠱𧈧也、蠱字注云、蠱𧈧蟲也、可証。

説解中の文字の増加について

〔鳳〕神鳥也、天老曰、鳳之象也、鴻前麀後、蛇頸魚尾、

鸛頸鴛思、竜文龜背、燕頤雞喙、五色備舉。（四卷二十五葉表）

爾雅釈文引此作鳳象、麟前鹿後、無鸛頸鴛思四字、韓詩外伝亦無四字、詩正義同、詩草木疏与韓詩外伝同、唯麀後作鹿後。

説解中の文字の変更と、句の削除について

〔弮〕角弓也、洛陽名弩曰弮、从弓冂聲。（十二卷五十

九葉裏）

詩釈文駢駢、説文作弮、盧文弨云、今説文解下引詩、解解角弓、掣釈文知、唐時説文弮下引詩弮弮角弓。詩の句を引く親字について

親字と説解全体の増加

〔越〕（二卷二十八葉表）

以上の例からも明らかのように、段注以外の説を引く校語も、親字や説解の字形や句を改めたり、削除、増加すべきことを指摘している内容である。その内容を検討すると、必ずしも同一の根拠に基づいているわけではないが、僅かな例を除いてほとんどは段玉裁も同意見であり、『説文解字注』において改めたり、あるいは改めるべきだと指摘しているものが多い。例に挙げたものの中では、「弮」字のみが段説と異なる。『詩経』小雅角弓の詩に「駢駢角弓」の句があり、陸徳明は釈文で「駢」は説文は「弮」に作ると述べている。ところが今の説文には「弮」ではなく「解」字の説解に「解解角弓」の一句が引かれている。これらをふまえて盧文弨は陸氏の見た説文は「弮」字の下に『詩経』の「弮弮角弓」の一句を引いていたのだろうと推測している。校斎はこの盧文弨説を校語に書きとめている。ところが段玉裁は、詩の釈文で陸徳明が「駢」は「説文」では「弮」に作るといつているのは、陸氏のたまたまの間違いであると、まことにあつさりとは片付けている。説文の「解」字の下に「解解角弓」の句をひいているのだから、陸氏は「駢」は説文は「解」に作るといふべきであった¹³というのである。

以上の他に校斎の按語もいくつか残されている。按語の内容

は次の通りである。

「福」祐也、从示畐声。（一卷二葉裏）

望之按、爾雅祐福也、賈誼書礼篇、祐大福也、不必改作祐字。

錢坫が毛本の「祐也」を「祐也」に改めたことを否定

「早」晨也、从日在甲上。（七卷二葉表）

爾雅刑疏引說文云、早晨也、從日在甲上、十古文甲字、望之按是与錢說合、然九經字樣云、早說文本從日下甲、今隸省、則知唐本从甲不十、當從旧作早也。

親字の字形が唐本では早となっていたこと、それに従うべきと述べる

「𠂔」惠也、从心无声。（十卷五十二葉表）

李從周字通曰、无声、无从反欠、五經文字、愛字作𠂔云、从无、望之按无即既傍无字、若是首𠂔之无字、豎画応上貫、則知唐宋人所見說文、从无不从先也、又按本書𠂔字、古文作𠂔、疑𠂔字从之。

无は反欠、あるいは无の古文𠂔に従うと述べる

按語の内容も親字や説解中の字形を正すものであったり、あるいは説解の内容を『爾雅』などを根拠に改めるものである。

この中で段説と異なるのは「福」字で、段は錯本の「福祐也」を「福備也」に改めている。掖斎も後にこの段説を本文中の余白に記録している。

以上見てきたように、掖斎の『説文解字斟詮』への書き込みは、段注からの引用であるといふに拘わらず、いずれも説文の諸版本や関係諸本を根拠に、『説文解字斟詮』の親字と説解の字形・内容・順序を正すもので、錢坫が『説文解字』を校訂し編纂した『説文解字斟詮』にさらに綿密な校訂を加えたものといえるだろう。例えば先に挙げた「錫」の校語で、掖斎は「錫」の字を「易」に従う「錫」に作るのは誤りであると、その根拠を大よそ次のように述べる。「戴侗は六書故では錫に作り徒郎の反であるといい、また、易と唐は同音で、孫愐は徐盈切としているが、易は徐盈の音ではないといっている。これからすれば戴氏が見た説文は易には从っていないかつたのである。積名は錫は洋であるといっている。（唐と同じ音の）洋で錫を解釈しているのだから、その字が易に从っていたことが判る。周礼小師、毛詩有瞽の釈文ならびに方言は、錫をそれぞれ辞盈反、夕清反、あるいは錫は張皇であるといっているが、いずれも別に唐という音もあるといっていることから、この字が易に从っていたことが証明できる。今本が錫に作るのは誤りであり、今韻の徐盈反、辞盈反、夕清反（いずれも段の十一部）は、徒郎反（同十部）から転入したものに過ぎない」と。これを見る

と、椋斎の議論の緻密さと厳密さを窺うことができ、『図書寮漢籍善本書目』の「細楷精を極む」「創見尠からず」の通りである。ただ、椋斎の説文学はこのように深く、広く、緻密で、そこから導かれた創見も多いが、それはあくまでも校勘・校訂を目的としたもので、学問として説文を体系的に研究したとは思えない。恐らく、椋斎の関心は、説文そのものにあつたのではなく、説文を用いて和書の校訂・研究をするために、許慎の『説文解字』により近い説文を求めることにあつたためであろう。しかし、そのような椋斎の意図はどうあろうと、結果として椋斎の説文学は、中国文字学の最高峰に位置する段玉裁の『説文解字注』に相通ずる内容となっている。『説文解字注』は訓古の書であるが、それが訓古の書として最も優れているのは、許慎の『説文解字』に説かれた原義・本義の使用例を注釈するのみならず、過去から蓄積された原義・本義を離れた沢山の使用例の中から必要かつ実質的な意味を取り出し、それが原義・本義からどのように転じたものであるかということ、段玉裁の最高の学識によってまとめられたものであるからだといわれている¹⁴。その意味で椋斎の説文学も校勘・校訂に止まるものではなく、期せずしてすぐれた訓古の学となっているのである。

おわりに

本論ではこれまであまり語られることのなかった椋斎の『説文解字斟詮』への書き込みの実態を明らかにし、また、その内容を通じて椋斎の説文学が段玉裁の『説文解字注』にも通ずる訓詁の学であることを明らかにしてきた。

最後になぜ『説文解字注』を用いての椋斎の『説文解字斟詮』校訂の仕事が、一巻の途中で終わっているのかを考えたい。先に推測したように、もし、椋斎が松崎慊堂らと『説文解字注』を一篇上下まで読み、そのテキストの写しを持っていたのなら、又もし、岡本況斎らと『説文解字注』をテキストに読書会を開催し、況斎が『説文解字疏』として一篇上下までの会読の記録をまとめたのなら、『説文解字注』は椋斎の手元にもあつた筈で、少なくとも『説文解字斟詮』一巻（一篇上下）の終わりまでは校訂の仕事を進め得た筈である。それを途中で投げ出してしまったのは、『説文解字斟詮』校訂の仕事を進めているうちに、諸本の校勘・校訂には『説文解字斟詮』よりも『説文解字注』そのものを利用したほうがはるかによい結果が得られると考えたからではないだろうか。そこには段玉裁の説文学への共感と尊敬の念が感じられる。ただ、椋斎と『説文解字注』の出会いにはあまりにも遅く、況斎らと『説文解字注』をテキストに説文会を開催して僅かに二三年後に死を迎え、会読の記録である況斎の『説文解字疏』も完成しなかったことは残念なことである。

(1) 拙論「江戸後期の考証学者と段玉裁の『説文解字注』」(『大妻比較文化』四)二〇〇三年三月参照。

(2) 山田琢訳注『懽堂日曆』2、平凡社『東洋文庫』、一九八七年参照。

(3) 前掲注「江戸後期の考証学者と段玉裁の『説文解字注』」参照。

(4) 現存する説文は十世紀半ばの徐鉉・徐鉉の研究、校訂を経たもので、前者の校訂したものが「大徐本」、つまりここである徐鉉本、後者のものが「小徐本」、つまり徐鉉本である。「繫伝」とは小徐が撰した『説文繫伝』四十巻のことで、「通釈」三十巻、「部叙」二巻、「通論」三巻などからなる。校訂の校語の中にも再々「繫伝」と出てくるが、それはこの『説文繫伝』の「通釈」、つまり「小徐本」のことである。

(5) 唐代の説文としては九世紀前半の唐鈔本木部・口部残巻の説文と、唐代の音義や類書に引かれた説文がある。例えば、玄扈の『一切経音義』、慧琳の『一切経音義』、『文選』の李善注、『史記』の諸注、『漢書』の章懷太子注や類書の『芸文類聚』『北堂書鈔』『初学記』などに引かれたものなどである。

(6) 四巻初には『詩経』魯頌泮水の釈文「憬九永反、遠行貌、沈又孔永反、説文作應、音贗、云闊也、一曰広大也」を引き、続いて「段玉裁云、今本説文、應下不引詩」とある。この段説は、『説文解字注』の「應」字(十篇下二十九a)の説解「詩曰、應彼淮夷」に付けられた段注「各本無此六字、今依詩釈文補、蓋許所拠毛詩如此」を読んで記録したものであろう。段玉裁の『詩経小学』はこの件については触れていない。

(7) 十一巻初には『詩経』鄭風溱洧の釈文「渙渙呼乱反、春水盛也。韓詩作洹洹、音丸、説文作汎汎、音父弓反」を引き、続いて「段玉裁云、許書必本作汎汎、从水丸声、胡官切、即洹字之別体」とある。

この段説は『説文解字注』の「漕」字(十一篇上一 三十九b)の説解「詩曰、漕与洧、方汎汎兮」に付けられた段注「汎音丸藥之丸、各本作渙渙、今正、此鄭風文也、今毛詩作渙渙、春水盛也、釈文曰、韓詩作洹洹、音丸、説文作汎、音父弓反、按作汎父弓反、音義俱非、蓋汎汎之誤、汎汎与洹洹同」を簡潔に述べたものと思われる。校勘記はこのことに触れず、『詩経小学』では『説文』が汎汎に作ることに、韓詩が洹洹に作ることをいうのみである。

(8) 前掲論文「江戸後期の考証学者と段玉裁の『説文解字注』」一〇八頁参照。

(9) 十巻初には「爾雅釈獸、鹿其跡速。釈文作麋云、素ト反、本又作速、字林云鹿迹、一曰速鹿子、段玉裁云、広雅麋跡解亢跡也、四字正解爾雅、鹿其跡速、麋其跡速、麋其跡解、兎其跡亢也、曹憲音跡為匹迹、然則爾雅速本作跡、説文籀文迹作跡、石鼓詩亦当説麋鹿迹速、案説文有麋字云、鹿迹也、從鹿速声、徐桑谷反、疑誤」とある。『爾雅注疏』の校訂の校語と比べると、『爾雅注疏』の校語には波線部分がなく、「説文籀文迹作跡」を段云の前に持ってきている。また、傍点の迹は跡に作っている。

(10) 「漕」字の上には「段玉裁云、秦声在今真臻韻、曾声在今蒸登韻、溱洧詩一章溱与人韻、二章洧与士韻、出鄭国之水本作溱、外伝孟子皆作溱洧、此書及水経注作漕誤也」とある。ただし、ここにある溱洧詩一章は褰裳一章の誤りである。

(11) 『懽堂日曆』によると、校訂が懽堂宅でともに『説文解字注』の会読を行ったのは文政十年六月二十九日から九月十九日までと、文政十一年四月十九日から五月十九日までの計十回である。文政十一年四月十九日の日曆には、「午前校訂は道純を携え来たり、ともに『説文段注』六紙を読む」とあるので、一回の会読で六葉程度を読んだと考えられ

る。『説文解字注』は藝文印書館本によれば、一篇上が四十一葉、下が五十四葉、上下合わせて九十五葉である。機械的に計算しても、一回六葉のスピードとすれば、一篇下の草部の途中まで、問題のないところは速い速度で読んでいたとすれば、一篇上下は読み終えたのであろう。なお、掖斎が抜けたあと、懽堂は門下生らと会読を重ね、ほぼ十回目の天保三年七月八日の日暦に「『説文段注』第二篇（全七十六葉）を読み終わる」とある。

(12)

掖斎はこの部分「諸侯以秘」としているが、引き間違いであろう。

(13)

「弭」字(十二篇下五十七b)の段注は次の通り。「按今詩駢駢角弓、釈文曰、駢説文作弭、音火全反、此陸氏之偶誤、蓋角部称駢駢角弓、陸当云説文作駢、而誤云作弭也」

(14)

頼惟勤監修 説文会編『説文入門』大修館書店、一九八三年、六七頁参照。